



1993.8.22 朝日新聞・新潟版

## 新たな出発探り討論集会

妙高高原 池ノ平クリスチャン村 30周年

### 質素の精神大切に ハイキングや音楽会提案

中頸・妙高高原町にある別荘地の「池ノ平クリスチャン村」が誕生して三十周年を迎えたのを記念し、村人が建てた日本基督教団妙高高原協会でのこのほど 討論集会「これからのクリスチャン村のあり方を探る」を開いた。 普段は大半が東京、横浜、名古屋、京都、神戸などに住んでいるが、集会には約七十人が参加、新たな出発を語り合った。

「村」の住民は、首都圏や関西地方を中心とした四十七家族で、職業は牧師、医師、会社員、大学教員、デザイナーや公務員などさまざま。 大自然の中で心身を休め、夏休みなどを中心に、清らかな交わりを結んできた。

集会では、新たな村づくりについて、色んな意見が出た。

「世の中は経済原則だが、ここはそうではない。質素であることの精神を大切にすることの村の運営にも参加したい。でも理事になりたいというわけではありません」（笑い）

「ハイキング委員会といったものも作ったらどうか」「婦人、少年、青年会といったそれぞれのグループの集会も持ちたい」「この教会で音楽会などもやってみたらどうでしょう」

村づくりは高田の教会で活動していた半田道夫牧師（69）が提唱した。 山林を何度も開拓し、今では約四ヘクタールの別荘地になった。村人の資格は原則的に「基督教信徒または求道者」。土地は教会の持ち物で、村人は地上権を手にする。が、地上権を譲り渡すには、村の理事会の承認が必要だ。

ロッジに関しては、自主規制がある。「村建築規則」がそれで、①建物の延べ床面積は八十三平方メートル以下 ②色彩は周囲の自然と調和のとれたものを ③境界には垣根などをしてはならない ④この地方に生育していない樹木、植物を植えてはならない、などをうたっている。

課題は、村人が親から子へという時期を迎えたことだ。 討論集会の副題も「どのように村の精神を受け継ぐのか」。が、会場からは「六十歳を迎えてロッジを建てられるようになり、やっと参加できるようになった」という声も上がった。 世代交代といった壁を乗り越え、村人の輪はさらに広がって行きそうだ。